The Japan Lung Cancer Society

133 「剖検例からみた肺重複癌の臨床的検討」

長崎市立市民病院内科,[1] 病理[2]
長崎大学第2内科[3]
○峯 豊,[1] 伊藤直美,[1] 中野正心,[1] 重松和人,[2] 神田哲郎,[3] 原 耕平[3]

目的と対象：1975～1986年の12年間に当院及び長崎大学第2内科で剖検された肺癌は各々203例，117例で重複癌は24例(12%)，10例(9%)であった。この34例の重複癌を対象として臨床的検討を行った。男性27例，女性7例，年令は54～84才，平均71才。家族に癌のあった症例は7/34(21%)，BIが800以上の症例は13例(38%)であった。
成績：34例のうち二重癌は32例，三重癌は2例。三重癌の2例は共にアスベストーシスがみられ，アスベスト曝露と発癌との関連性が示唆された。1年以内に発見された重複癌を同時性，1年以上を異時性とすると，同時性は26例，異時性は8例であった。肺癌の組織型は扁平上皮癌16例(42%)，腺癌13例(34%)，小細胞癌7例(19%)，大細胞癌2例(5%)であった。組み合せは胃癌，前立腺癌各6例，肺癌4例，腎臓癌，大腸癌各3例，子宮癌，悪性リンパ腫各2例，食道癌，胆管癌，胆のう癌，膀胱癌，上顎癌各1例であった。剖検で初めて発見された例は21/34(62%)，で，内訳は前立腺癌6例，甲状腺癌5例，肺癌4例，以下腎臓癌，大腸癌，胃癌，膀胱癌，悪性リンパ腫であった。肺多発癌は4例（対側肺3例，同側肺1例）で，扁平上皮癌と腺癌の組み合せが3例，扁平上皮癌と小細胞癌が1例であった。34例のうち31例で肺癌に対して治療がなされ，33例で死因は肺癌に関連していた。

134 肺癌を含む重複癌の検討

神奈川県立がんセンター内科[1]，放射線科[2]，病理科[3]，神奈川県立長浜病院[4]，
○金子 保[1]，野田和正[1]，佐野文彦[1]，成田雅弘[1]，田中利彦[2]，飯田萬一[3]，松崎 稔[4]，

1975～1985年の肺癌症例1042例における重複癌について検討した．他臓器との重複癌は46例，原発性多発肺癌は12例で計58例5.6%(男38例，女20例)であった．
①他臓器との重複悪性腫瘍：男28例・女18例で，同時性(1年以内)10例，異時発生の肺先行7例，肺後発29例であった．二重癌42例の臓器内訳は胃9，乳腺7，子宮7，結腸4，食道3等で，三重癌4例8病巣では胃3の他，結腸，膀胱，胆嚢，膵，卵巣であり，これらの組織型は扁平上皮癌(扁)13，腺癌(腺)9，移行上皮癌3，肉腫3等であり，また肺癌では扁28，腺13，小細胞癌(小)2，大細胞癌(大)2等で，いずれでも扁平上皮癌が多かった．
②原発性多発肺癌：男10例・女2例で，同時性9例・異時性3例；両側性4例・同側性8例で，12例中11例は喫煙指数400以上であった．三重癌3例を含む27病巣の組織型は，扁13，腺9，小3，大1，粘表皮癌1病巣であり12例中9例(75%)に扁平上皮癌がみられた．
③予後：異時性重複癌の死亡31例の第2癌発見後の生存期間は肺先行例・肺後発例いずれでも1年余りであり，大半が肺癌死であった．また同時例についても他臓器との重複例・多発肺癌例のいずれも1年余りと短く，重複悪性腫瘍における肺癌合併例は予後が悪い傾向にあった．

135 肺癌と他臓器重複癌の治療成績

東京医科大学外科
○沖津 宏，内藤 淳，田近栄四郎，中嶋 伸，田口雅彦，高橋英介，林 永信，雨宮隆太，於保健吉，早田義博

目的：近年増加の傾向にある肺・他臓器重複癌の治療成績について検討した。
対象：昭和48～61年に経験した肺癌1375例中他臓器重複癌47例(3.4%)を対象とした。男女比は38：9であり第1癌発生の年齢は平均60.1歳であった。3重複癌2例，2重複癌45例で，同時性14例，異時性33例(肺癌先行3例)であった。重複臓器は胃が22例(早期癌14例)，喉頭が6例と多く，肺癌の組織型は扁平上皮癌が25例と多かった。
治療成績：治療法別に以下の如く分類した。A群両者とも切除12例，B群肺癌のみ切除4例，C群他臓器癌のみ切除22例，D群両者非切除9例。肺癌治療後の3年生存率は，全例27%(MST12ケ月)，A群64%，B群0%，C群20%，D群10%であった。A群では8例が生存中(最長9年)であり，その予後は良好であった。他群での5年以上生存例はC群に2例(63ケ月，67ケ月)，D群に1例(60ケ月)であった。前者は肺扁平上皮癌に対する放射線治療例であり，後者は両病巣に対する内視鏡的レーザー治療例であった。
結論：肺・他臓器重複癌は早期胃癌および喉頭癌との重複が多かった。これらは治療成績が良好なことより，肺癌の早期発見治療が予後改善に繋がることを認めた。また非切除例にも長期生存例が得られたことは，肺および各臓器の組織型・進行度をふまえた治療を選択することが，治療成績を向上させるために重要である。

136 多発肺癌症例の検討

岡山大学第二外科
○中田昌男，伊達洋至，河田真作，小橋雄一，三宅敬二郎，森山重治，宮井芳明，中野秀治，栗田 啓，清水信義，寺本 滋

昭和51年から昭和62年5月までの岡山大学第二外科における肺癌症例は712例で，そのうちMartiniの定義を満足する多発肺癌は9例であった。男性6例，女性3例で平均66.9才であった。同時性は3例，異時性は6例で第1癌と第2癌の間隔は1年10ケ月から8年7ケ月，平均5年3ケ月であった。同側性は3例，両側性は6例であった。組織型が同一のものが6例，異なるものが3例で，腺癌－腺癌と扁平上皮癌－扁平上皮癌がそれぞれ3例ずつあった。同時性のもので同側性の症例は一期的に，両側性の症例は二期的に切除を行った。異時性のものも第1癌には全て治癒切除が施行され，いずれもStage Iであった。第2癌に対しては5例に切除術が施行されたが，1例は発見時すでに遠隔転移を認め手術は行なわなかった。第2癌の手術例5例中4例には呼吸機能上の問題から縮小手術が行なわれた。手術例8例中2例は第2癌術後6ケ月で癌死したが，他の6例は術後平均期間8.1ケ月と短かいながらも現在生存中である。また，定義は満足しないが同時性多発肺癌が疑われる症例が2例あった。組織型が同一の両側肺癌で7番リンパ節に転移があった症例である。いずれの症例も二期的に切除を行なったが術後早期に癌死した。当科における多発肺癌症例について検討を加え報告する。

NII-Electronic Library Service